

## 「2016年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 山岡翔

本プログラムは、現地の日本語学習者との交流、提携校の授業参加、共同発表、課外活動等を通して、互いの国の文化的理解・国際的理解を深める、という趣旨のものであった。現地の大学では現地学生のための日本語の授業の補助及び派遣者のための人文学系講義への参加のほか、農村部の視察も含んでいる。今回訪問した大学はベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学(USSH)及び外国語大学(ULIS)である。課外時間は主に現地学生との交流、観光、及び共同発表の準備等に充てられた。

本プログラムにおいて得られたことは大きく分けて次の2点である。まず、異なる文化を持つ人々との交流を通して、自国の文化をある程度相対化することができるようになったということ。そしてもう一つは、生のベトナム語に触れることができたということである。まず前者に関して、文化は(当然のことであるが)我々人間の生活の様々な面に反映される。そういった文化の反映に関して、自国での生活においてはあまりに当然過ぎていちいち考えることはないが、実際に異なる文化の国に身を置いてみると、そういった反映を生身で感じることとなり、自国との相違や類似が強く意識される。こういった文化の相互比較及び相対化ができたということは私にとって大きな経験であった。しかし、歴史背景・風俗慣習などに関する背景知識が十分ではなかったため、そういった文化の違いを生んだ要因を分析・考察するまでには至らなかった点が反省である。次に後者に関して、私は言語学を専門としており、特にベトナム語の音声について深い関心があったため、最近1年間でベトナム語を学習していた。しかし、実際にベトナムに行った経験はなく、日本に滞在中のベトナム人も非常に限られるため、ベトナム人の話す生のベトナム語に触れたり、運用したりする機会は非常に少なかった。そのため本プログラムにおいて、実際に使用されている生のベトナム語に触れたり、自分のベトナム語能力を試したりすることにより、言語的・語学的関心を大いに深めることができた。しかし、現地の学生の日本語学習の障害とならないように意識しすぎたこと、運用の面での失敗を恐れてしまったことなどから、ベトナム語の運用や言語学的な観察・分析を十分にできなかった点が反省である。

また、そのほか海外で得られた経験としては、音楽に関する経験がある。私は元来言語学のほかに音楽にも非常に関心があった。ベトナムには宮廷音楽や民謡等の伝統音楽が数多く残っており、そのうち無形文化遺産に登録されているものも少なくない(ただし、日本と同様に欧米諸国の大衆音楽も相当に流入しており、伝統音楽を圧迫しているというのが現状のようであるが)。本プログラムの実施期間中、私は実際にそういった伝統音楽の鑑賞に行ったり、現地の学生に質問したりすることで、ベトナムの音楽に関する興味を深めることができた。また、ベトナムの音楽文化に触れることで、自国の音楽文化について再考する機会も得られた。

最後に、本プログラムが私の進路に与えた影響に関して、私は上でも述べた通り、元来ベトナム語の音声に興味があったため、このベトナムという地を自分の研究のフィールドにするつもりで本プログラムに参加した。その結果、この地をフィールドにしようという意思がより頑健になるとともに、今後の研究において非常に重要な鍵となるであろう現地の人々とのつながりをも得ることができた。また、今後ベトナムに留学することも以前から検討していたが、今回その留学先の候補である大学を実際に訪問することができた。そのため、本プログラムは私の研究・進路において非常に有用であったと考えている。